

高 姊 笹
山 崎 川
樗 嘲 臨
牛 風 風
集 集 集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀

昭和三年十一月二十五日印刷
昭和三年十二月一日發行

現代日本文學全集 第十三篇

著者

高 姉 笹
山 崎 川
櫻 潮 臨
牛 風 風

發行者

山 本 美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者

杉 山 愛 二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改 造 社

振替 東京 八四〇
電話 芝 (43) 二二二二
四三二二 番番番番

「樗牛嘲風臨風集」目次

高山樗牛集

巻頭寫眞(照影・筆蹟)

樗牛集の首に

瀧口入道

おきく

傷心録

わがそでの記

自殺論

清見寺の鐘聲

思ひ出の記

況後録

清見瀧日記

感慨一東

巢林子の女性

釋迦

平相國

平家維感

世界の四聖

日蓮上人とは如何なる人ぞ……………一九

日蓮と基督(其一)……………二六

日蓮と基督(其二)……………二九

月夜の美感に就いて……………三七

人生終に如何……………三八

東西二文明の衝突……………三八

明治思想の變遷……………四六

日本主義……………四六

美的生活を論ず……………四六

靜思錄……………四六

雜篇……………四六

本末の顛倒……………四六

今の哲學……………四六

自ら欺く無くむは幸也……………四六

中心果して信ずる所ある乎……………四六

學說と人格……………四六

人々自ら悟らざるべからず……………四六

空腹高心……………四六

道義亡國……………四六

何ぞ思はざるの甚しき……………三八

心に會するもの唯是れ心……………三八

何ぞ人の異を妨げむ……………三八

千萬言唯意のまゝのみ……………三八

吾は永く吾たらむ……………三八

十九世紀文明の王冠……………三八

笑はむ乎、狂せむ乎……………三八

吾をして詩人たらしめば……………三八

言論畢竟人物のみ……………三八

米と砂……………三八

其愚や及ばず……………三八

道學先生の世界……………三八

何ぞ一に煩瑣なる……………三八

口耳の學……………三八

罪は貧民にあり……………三八

田中智學氏の『宗門の維新』……………三八

天才の出現……………三八

天才の犠牲……………三八

天才無き世界……………三八

平等主義と天才……………三八

吾人凡て之を憎む……………三八

二個の眞理……………三八

偉人と凡人との別	三三
質値と我	三三
惡を憎むこと何ぞ甚しき	三三
癲狂院	三三
ニイチエの批難者	三三
ニイチエの歎美者	三四
自然の兒	三四
何ぞが故ぞ	三五
貴き哉是の責	三五
性慾	三五
何ぞ其の祝福を讃美せざる	三五
性慾の動くところ	三五
地獄の火印を烙けられたるもの	三五
性慾の醇化	三六
久しい故自ら欺けることや	三六
價値也、名目に非ざる也	三六
眞の教育、眞の道德	三六
文學及人生	三七
運命と悲劇	三〇
天才論	三五
戯曲に於ける幽霊	三九
一葉女史の『たけくらべ』を讀みて	四一

我邦現今の文藝界に於ける批評家	二二三
の本務	二二三
ワルト、ホイットマンを論ず	二二六
土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書	二四
文明批評家としての文學者	二〇
姉崎嘲風に與ふる書	二七
現代文章私見	二八
文藝雜誌談	六五
無題錄	六九
消息	二九
(附) 隨筆	
略歴	三〇
著作年表	三二
姉崎嘲風集	
卷頭寫眞(附影)	
序 詞(筆蹟)	三八
復活の曙光	三九
ゴットハルトの雪	三六
湖上の春	三七
聖者の故郷アッシジ	三八

イタリアの別れ、エネチアの二日	四〇六
——以上四篇『花つみ日記』より——	
ワグネルの詩簡	四二
清見瀧の一夏	四一八
清見瀧の除夜	四三三
嗚呼野の人	四三五
ベクリンが「波の音つれ」	四四〇
——以上五篇『停雲集』より——	
(附) 隨筆	
年譜	四四一
笹川臨風集	
卷頭寫眞(附影)	
序 詞(筆蹟)	四四四
舞臺	四四五
女水哥傳	四九九
柳屋お藤	五二六
傳奇日女若	五三九
櫻花記	五五四
(附) 歌曲、句	
年譜	五五六

高山樗牛集

樗牛集の首に

赤門の文科卒業生中には、多くの學者、多くの文士を出して、學界文壇に寄與してゐる所が少からずあるが、其のうちで文壇に大波瀾を捲き起し、其の影響する所最も多大であつた天才を求めると、指を漱石と樗牛とに屈せねばなるまい。漱石が明治創作界の雄であつたとしても、樗牛も亦明治批評界の覇者であつた。但し漱石は中年以後に初めて名を出したので、中年以後の人に多くの崇拜者を持つてゐるが、樗牛は早くから有名であつたので、其の歸依者は青春の人に多い。樗牛全集は青年の士が必ず讀まねばならぬ書であつた。樗牛全集は青春の人に取て是非とも通過せねばならぬ驛站であつた。青年の血に燃え情に熱したものは、樗牛に共鳴して、其の壯快なる文章に讚美と嘆賞とを惜まなかつたのである。其の才華絢爛にして、語句の瑰麗なるは、近時の青年に取りて、やゝ難解の感あるがために、以前ほどに歸依者を有たなくなつたとは云へ、猶樗牛を説くもの多きは、彼の偉大なるを思はせる。

樗牛は稀有の才人である。羽前鶴岡が彼を出したことを誇り、青葉城が彼を有したのを誇り、

赤門が彼であつたのを誇り、我等が彼を友人としてゐたのを誇るばかりでなく、明治文壇に彼を産出したのは、大に誇りとすべきである。しかも彼の天才は其の少年時代から燦として輝き、高等中學に於て既に鬱然たる巨匠の魄を有し、大學に入りて遠く儔輩を抜き、一たび雑誌太陽の論壇に立つと、一躍して大家となり、群雄を壓倒するの儼があつた。青春の氣熱えんばかりの彼は、情の進る所、瀧口入道となり、わがそのの記となり、清見海日記となつたが、一轉して日本主義となり、再轉して美的生活論者となり、ニイチエの讚美家となつて、文明批評家を以て任じ、遂に聖運を崇拜して、日蓮主義者として壯烈無比の觀を呈した。其の一生は甚だ短かつたが、彼の思索は日覺しいほどに進歩發展した。其の一生をより長く、天壽を全うせしめたなら、其の進歩は實に測るべからざるものがあつたらう。彼には不斷の進歩があつて、其の炎は烈々として、物皆焼き盡さずんば已まざる勢があつたのである。彼には絶えず青春の泉が湧いてゐた。滾滾たる清新の氣が熾溢してゐた。そこには煩悶もあり、懷疑もあつたが、彼は躊躇せず、逡巡せずして、自ら地歩を開拓し、遂に信仰の道を開いたのであつた。

英雄兒たる彼は英雄僧聖日蓮に依りて、最も善い歸依の本尊を見出したのであつた。

樗牛と嘲風とは無二の親友であつた。親友と云はんよりも寧ろ信友であつた。樗牛が世界的學者となつた嘲風と肝膽相照らすに至つたのは偶々嘲風が單なる學究でなくして、情熱家であつたことを裏書するに足りる。今でこそ大學圖書館長で納まつてゐるものの、嘲風も青春の氣の充ち満ちた情熱家である。彼は學者として眞摯なる研究者であり、宗教學者として、法華經行者日蓮の著者として、切支丹研究家として、他の追隨を許さぬものがあるが、彼が極めて情熱家であることは、我等友人だけが善く知つてゐる。交友既に四十年に垂んとして、一家の如くに於てゐる私は、此點に於て樗牛嘲風の相推許してゐる所以を十分に會得する。

我等の仲間以前天狗會と云ふものがあつて當時年少氣鋭の我等は相會合して盛に氣を吐いてゐたものである。秋風落葉、今や存するものは甚だ少くなつた。然し青春の元氣旺盛であつた樗牛は我等に常に若くあれよと教へてくれる。偶々瓦全する私は、玉碎せる彼に依りて深く學んでゐることを感銘してゐる。

昭和三年御大禮の翌日

笹川臨風識

瀧 口 入 道

第一

やがて來む壽永の秋の哀、治承の春の樂に知る由も無く、六歳の後に昔の夢を辿りて直衣の袖を絞りし人々には、今宵の歡會も中々に忘れぬ思寝の涙なるべし。

驕る平家を盛の櫻に比べてか、散りての後の哀は思はず、入道相國が花見の宴とて、六十餘州の春を一夕の臺に集めし都西八條の邸宅、君ならでは人に非ずと唱はれし一門の公達、宗徒の人々は言ふも更なり、華貴攝録の子弟の荷も武門の蔭を覆ひに當世の榮華に誇らむずる輩は、今日を晴にと裝飾ひて、綺羅星の如く連りたる有様、燦然として眩し計り、さしも善美を盡せる虹梁鴛瓦の砌も影薄げにぞ見えし。あはれ此程までは殿上の交をだに嫌はれし人の子、家の族、今は紫緋紋綾に禁色を猥にして、をさく傍若無人の振舞あるを見ても、眉を蹙むる人に絶えて無く、夫れさへあるに衣袍の紋色、烏帽子のため様ま

で、萬六波羅様をまねびて時知顔なる世は愈々平家の世と覺えたり。

見渡せば正面に唐錦の茵を敷ける上に、沈香の臨息に身を持たせ、解角同相の三衣の下に天魔波旬の慾念を去りやらず、一門の榮華を三世の命とせる入道清盛、さても敷揚に坐せる其傍には嫡子小松の内大臣重盛卿、次男中納言宗盛、三位中將知盛を初として同族の公卿十餘人、殿上三十餘人、其他衛府諸司數十人、平家の一族を擧げて世には又人無くぞ見られる。時の帝の中宮、後に建禮門院と申せしは入道が第四の女なりしかば、此夜の盛宴に漏れ給はず、冊ける女房曹司は皆々晴の衣裳に綺羅を裁ひ、六宮の粉黛何れ劣らず粧を凝して、花にはあらで得ならぬ匂、そよ吹く風毎に素袍の袖を掃むれば、末座に並居る若侍等の亂れもせぬ衣髪をつくらふも可笑し。時は是れ陽春三月の暮、青海の簾高く捲上げて、前に廣庭を眺むる大弘間、咲きも残らず散り初めず、欄干近く雲かと紛ふ滿架の櫻、今を盛に匂ふ

様に、月さへ懸りて夢の如き圓なる影、臍に照渡りて、滿庭の風色碧紗に包まれたらむ如く、一刻千金も寄ならず。内には遠侍のあなたより、遙對屋に沿うて樓上地下を照せる銀燭の光、錦繡の戸張、龍鬘の板疊に輝きて、さしも廣大なる西八條の館に光到らぬ隈もなし。あはれ昔に有りきてふ、金谷園裏の春の夕もよも是には過ぎじとぞ思はれける。

饗宴の盛大善美を盡せること言ふも愚なり、庭前には錦の帳幕を張りて舞臺を設け、管絃鼓箏の響は興を助けて短き春の夜の関ぐるを知らず、豫て召し置かれたる白拍子の舞もはや終りし頃ほひ、さと帛を裂くが如き四絃一撥の琴の音に連れて、繁絃急管のしらべ洋洋として響き互れば、堂上堂下俄に動搖めきて、「あれこそ壯年は、あれこそは小松殿の御内に花と歌はれし重景殿など女房共の照り合ふ聲々に、人々等しく樂屋の方を振向けば、右の方より薄紅の素袍に右の袖を肩脱ぎ、煙銅の細太刀に緋地の水の紋の平袴を下げ、白綾の水干、櫻萌黃の衣に山吹色の下襲、背には胡篋を解きて老掛を懸け、露の盛なる櫻かざして立てられたるは四位少將維盛卿、御年辛く二十二、青絲

の髪、紅玉の膚、平門第一の美男とて、かきす櫻も色失せて、何れを花何れを人と分たざりけり。左の方よりは足助二郎重景とて、小松殿恩顧の侍なるが、維盛卿より弱きこと二歳にて今年方に二十の壯年、上下同じ素組の水干の下に燃ゆるが如き緋の下袍を見せ、厚塗の立烏帽子に平座の細絹なるを佩き、袂豊に舞ひ出でたる有様、宛然一幅の書圖とも見るべかりけり。二人共何れ劣らぬ優美の姿、適怨清和、曲に随つて一絲も亂れぬ歩武の節、首尾能く青海波をぞ舞ひ納めける。満座の人々感に堪へざるは無く、中宮よりは殊に女房を便に纏頭の御衣を懸けられければ、二人は面目身に餘りて退り出でぬ。跡にて口善惡なき女房共は、少將殿こそ深山木の中、楊梅、足助殿こそ桂野の小松、何れ花も實も有る武士よなど言合へりける。知るも知らぬも羨まぬは無きに、父なる卿の眼前に此を見て如何計り嬉しく思ひ給ふらむと人々上座の方を打見やれば、入道相國の然も喜ばしげなる笑顔に引換へて、小松殿は差し俯きて人に面を見らるゝを懶げに見え給ふぞ訝しき。

第二

西八條殿の痛ぐ計りの喝采を跡にして維盛重

景の退り出でし後に一個の少女こそ顯れたれ。

是ぞ此夜の舞の納めと聞えければ、人々許を環して之を見れば、年齒は十六七、精好の緋の袴ふみしだき、柳裏の五衣打重ね、丈にも餘る緑の黒髪後にゆりかけたる様は、舞子白拍子の媚態あるには似で、四雅に蕩長けて見えにける。一曲舞ひ納む春榮華、細きは珊瑚を砕く一雨の曲、風に靡けるさゝがにの絲、輕く、太きは瀧津瀬の鳴渡る千萬の聲、落葉の陰に村雨の響重し、綾羅の袂ゆたかに翻るは花に休める女蝶の翼か、舞歩の節急なるは蜉蝣の水に點ずるに似たり。折らば落ちむ萩の露、拾はば消えむ玉篠の、あはれにも亦婉やかなる其姿。見る人憐然として酔へるが如く、布衣に立烏帽子せる若殿原は、あはれ何處の誰が女子ぞ、花薫り月霞む竹の手枕に、君が夢路に入らむ人こそ世にも果報なる人なれなど、袖袖引合ひてのゝしり合へるぞ笑止なる。

夢華の夢に昔を忘れ、細太刀の輕さに風雅の鈴を打ちたる六波羅武士の腕をば一指の舞に溶したる彼の少女の、満座の秋波に送られて退り出でしを此夜の宴の終として人々思ひに退出し、中宮もやがて還御あり、跡には春の夜の臘月、残り惜げに欄干の邊に踰躡ふも長

閑けしや。

此夜三條大路を左に、御所の裏手の御溝端を辿り行く骨格逞しき一個の武士あり。月を負ひて其顔は定かならねども、立烏帽子に稜高の布衣を着け、蛭巻の太刀の柄太きを横へたる夜目にも爽かなる出立は、何れ六波羅わたりの内人と知られたり。御溝を挟んで今を盛なる櫻の色に見て欲しげなるに目もかけず、物思はしげに小手又きて、少しくうなだれたる頭の重けに見ゆるは、太息吐く爲にやあらむ。扱も春の夜の月花に換へて何の宴ぞ。西八條の御宴より歸り途なる侍の一群二群、舞の評など樂しげに誰憚らず罵り合ひて、果は高笑して打興ずるを、件の侍は折々耳側で、時に冷かに打笑む様仔細ありけなり。中宮の御所をはや過ぎて、垣越の松影月を漏さで墨の如く暗き邊に至りて不圖首を擧げて暫し四邊を眺めしが、俄に心付きし如く足早に元來し道に戻りける。西八條より還御せられたる中宮の御輿、今しも宮門を入りしを見、最と本意無げに跡見送りて門前に佇立みける。後れ馳せの老女の訝しげに己れが容子を打睨り居るに心付き、急ぎ立去らむとせしが、何思ひけむとと振向きて、件の老女を呼止めぬ。

何の御用と問はれて、稍躊躇ひしが、「今宵の御宴の終に春鶯囀を舞はれし女子は何れ中宮の御内ならむと見受けしが、名は何と言はるや」。老女は男の容姿を暫し眺め居たりしが微笑みながら、「扱も笑止の事も有るものかな、西八條を出づる時、色清けなる人の妾を捉へて同じ事を問はれしが、あれは横笛とて近き頃御室の郷より習司に見えし者なれば、知る人無きも理にこそ、御身は名を聞いて何にし給ふ。男はハツと顔赤らめて「勝れて舞の上手なれば」答ふる言葉聞きも了らで、老女はホ、と意味ありげなる笑を残して門内に走り入りぬ。

「横笛、横笛」。件の武士は幾度か獨語しながら、徐に元來し方に歸り行きぬ。霞の底に響く法性寺の鐘の聲初更を告ぐる頃にやあらむ。御薄の那方に長く曳ける我影に驚きて、傾く月を見返る男、眉太く鼻隆く、一見凛々しき勇士の相貌、月に笑めるか、花に咲ふか、あはれ臉の邊に一掬の微笑を帯びぬ。

第三

當時小松殿の侍に齋藤瀧口時頼と云ふ武士ありけり。父は左衛門茂頼とて、齢古稀に餘れる老武者にて、壯年の頃より數ヶ度の戦場にて

類稀なる手柄を顯したりしが、今は年老いたれば其子の行末を頼りに幾年を樂みける。小松殿は其功を賞で給ひ、時頼を瀧口の侍に取立て、數多き侍の中に殊に恩顧を給はりける。

時頼は時年二十三、性潤達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく、早く母に別れ武骨一邊の父の膝下に養はれしかば、朝夕耳にせしものは名ある武士が先陣拔懸けの譽ある功名談に非ざれば、弓箭甲冑の故實、誓垂れし幼時より劍の光、弦の響の裡に人と爲りて、浮きたる世の雜事は刀の柄の塵程も知らず、美田の源次が堀川の功名に現を抜して赤檜の木太刀を振舞はせし十二三の昔より、空脇撫でて長劍の輕きを叩つ二十三年の春の今日まで、世に畏しきものを見ず、出入る息を除きては六尺の體、何處を贈と分くべくも見えず、實に保平の昔を其儘の六波羅武士の模範なりけり。然れば小松殿も時頼を末頼似し者に思ひ、行末には御子維盛卿の附人になさばやと常々目を懸けられ、左衛門が何候の折々に、「茂頼、其方は善き作を持ちて仕合者ぞ」と仰せらるゝを、七十の老父、曲りし背も反らむ計りにぞ嬉しがりける。

時は治承の春、世は平家の盛、そも天喜康

平の以來、九十年の春秋、都も鄙も打墾しし源氏の白旗も、保元平治の二度の戰を都の名残に、脆くも武門の衰を東海の隅に止めしより、六十餘州に到らぬ隈無き平家の權勢、驕る者久しからずとは驕れる者如何ぞ知るべき。養和の秋、富士河の水禽も、まだ一年の來ぬ夢なれば、一門の公卿殿上人は言はずもあれ、上下の武士何時しか文弱の流に染みて、嘗て丈夫の褰に見せし向う疵もいつの間にか水蟹の陰に掩はれて、重きを誇りし圓打の野太刀も、何時しか銀造の細鞘に反を打たせ、清らなる布衣の下に練貫の袖さへ見ゆるに、弓矢持つべき手に管絃の調とは言ふもうたてき事なりけり。

時頼世の有様を觀て、熟々思ふ様、扱も心得ぬ六波羅武士が舉動かな、父なる人祖父なる人は、昔知らぬ若殿原に行末短きが耀の夢を食らせむとて其骨血はよも濫がじ。萬一事有るの曉には、絲竹に鍛へし腕、白金造の打物は何程の用にか立つべき。射向の袖を却て覆ひに袴のみに烈しく打つて、笑を敵に残すは眼のあたり見るが如し。君の御馬前に天晴勇士の名を昭して討死すべき武士が、何處に二つの命ありて、歌舞優樂の遊に荒める所存の程こそ知れぬ。

弓矢の外には武士の住むべき世有りとも思

はぬ一徹の時頼には、兎角憎はしく、苦々しき事のみ耳目に觸れて平和の世の中面白からず、あはれ何處にても一戦の起れかし、いでや二十餘年の風雨に鍛へし我技倆を顯して、日頃我を武骨者と嘲りし優長武士に一泡吹かせむずと思ひけり。衆人醉へる中に獨り醒むる者は容れられず、斯る氣質なれば時頼は自ら儕輩に疎ぜられ、満口時頼とは武骨者の異名よなど嘲り合ひて、時流外れに粗大なる布衣を着て鐵卷の丸鞘を鴨尻に横へし後姿を、蔭にて指し笑ふ者も少からざりし。

* * * * *

西八條の花見の宴に時頼も連りけり。其夜更闌けて家に歸り、其翌朝は常に似ず朝日影窓に差込む頃、やうやく臥床を出でしが、顔の色少しく着味を帯びたり、終夜眠らでありしにや。

此夜、御所の溝端に人跡絶えしころ、中宮の御殿の前に月を負ひて歩むは、紛ふ方なく先の夜に老女を捉へて横笛が名を尋ねし武士なり。物思はしげに御門の邊を行きつ戻りつ、月の光に振向ける顔見れば、まさしく齋藤瀧口時頼なりけり。

第四

物の哀も是よりぞ知る、戀ほど世に怪しきものはあらじ。稽古の窓に向つて三諦止觀の月を樂める身も、一朝折りかへす花染の香に幾年の行業を捨てし人、百夜の樹の端書につれなき君を怨みわびて、亂れ苦しき忍草の露と消えにし人、さては相見ての後のたぐひの短きに戀悲みし永の月日を恨みて三衣一鉢に空なる情を觀ぜし人、惟へば孰れか戀の奴に非ざるべき。戀や、秋萩の葉末に置ける露のごと、空なれども、中に寫せる月影は圓なる望とも見られぬべく、今の憂身をつらしと嘲てども戀せぬ前の越方は何を樂に暮しけむと思へば涙は此身の命なりけり。夕旦の鐘の聲も餘所ならぬ哀に響く今日は、過ぎし春秋の今更心なきに驚かれ、鳥の聲、蟲の音にも心何となう動きて、我にもあらで情の外に行末もなし。戀せる今を迷と觀れば惜れる昔の慕ふべくも思はれず、悟れる今を戀と觀れば昔の迷こそ中々に樂しけれ。戀程世に訝しきものはあらじ。そも人、何を望み何を目的に渡りぐるし無路を辿るぞ。我も目知らず、只靡けながら夢と現の境を歩む身に、ましてや何れを戀の始終と思ひ別たむ

や。そも戀てふもの何より來り何こをさして去る、人の心の隈は映すべき鏡なれば何れ思案の外なんめり。

いかなれば齋藤瀧口、今更武骨者の銘打つた鐵卷をよそにし、負ふにやさしき横笛の名に笑める、いかなれば時頼、常にもあらで夜を冒して中宮の御所には忍べる、吁々いつしか戀の淵に落ちけるなり。

西八條の花見の席に中宮の曹司横笛を一日見時頼は、世には斯る氣高き美しき女子も有るもの哉と心竊に駭きしが、雲を遏め雲を廻す妙なる舞の手振を見ても行くうち、胸怪しう蘇き心何となく安からざるが如く、二十三年の今まで絶えて覺なき異様の感情雲の如く湧出でて、例へば渚を閉ぢし池の水の春風に溶けたらむが如く、若くは満身の力をはりつめし手足の節々一時に緩みしが如く、茫然として行方も知らぬ通路を我ながら路迷へる思して、果は舞終り樂收りしにも心付かず、戀て席を退り出で、何處ともなく出で行きしが、あはれ横笛とは時頼其夜初めて覺えし女子の名なりけり。日來快活にして物に鬱する事などの夢にも無かりし時頼の氣風何時しか變りて、憂はしげに思ひ煩ふ朝夕の様唯ならず、紅色を帯びし

つや／＼しき類の色少しく蒼きめて、常にも例で物言ふ事も稀になり太息の数のみぞ唯知りける。果は瀧狐の厚敷に水櫛當て、管長の大束に今様の大紋の布衣は平生の氣象に似もやらずと、時頼を知れる人訝しく思はぬは無かりけり。

第五

打つて變りし瀧口が今日此頃の有様に、あれ見よ、當世嫌ひの武骨者も一度は折らねばならぬ我慢なるに、笑止や口頃吾等を尻目に懸けて輕薄武士と言はぬ計りの顔、今更何處に下げて吾等に對ひ得る、など後指さして嘲り笑ふ者あれども、瀧口少しも意に介せざるが如く應對等は常の如く振舞ひけり。されど自慢の短髪搔撫する隙もなく、青黛の跡絶えず鮮かにして、萌黄の狩衣に摺皮の蘭草履などよろづ派手やかなる出立は人目にそれと紛ふべくもあらず。顔容さへ稍々瘦れて、起居も懶きが如く見ゆれども、人に向つて氣色の勝れざるを嘲ちし事もなく、偶々病など無きやと問ふ人あれば、却て意外の面地して常にも益して儼かなりと答へけり。皆是れ戀の業なりとは、哀れや時頼未だ夢にも心づかず、我ともなく人ともあらで只思ひ煩

へるのみ。思ひ煩へる事さへも心自ら知らず、例へば夢の中に伏床を抜出で、終夜山の巔水の涯を迷ひつくしたらむ人こそさながら瀧口が今の有様に似たりとも見るべけれ。

人にも我にも行方知れざる戀の歩路をば、瀧口何處のはてまで辿りけむ、夕とも言はず、既とも言はず屋敷を出で、行先は己れならで知る人もなく、只門出の勢に引きかへて、

辰足の打鼈れたる様、さすがに遠路の勞とも思はれず。一月餘も過ぎて其年の春も暮れ、青葉の影に時鳥の初聲聞く夏の初となりたれども、かゝる有様の候まる色だに見えず、はては十幾年の間、朝夕樂みし弓馬の稽古さへ自ら怠り勝になりて、胴丸に積る埃の堆きに口もかけず、名に負へる鎖巻は高く長押に掛けられて、螺鈿の櫓を散せる黒鞘に、摺敷の鞘巻指し添へたる立姿は、若し我ならざりせば一月前の時頼、唯も吐きかねざる花奢の風俗なりし。

されば變り果てし容姿に慣れて、笑ひ譏る人も漸く少くなりし頃、蟬聲暗しき夏の暮にもなりけむ、瀧口が顔愈々やつれ、頬肉は目立つ迄に落ちて眉のみ秀で、凄きほど色蒼白みて、濃かなる雙の鬢のみぞ愈々其澤を増しける。氣向かねばとて病と稱して小松殿が熊野參籠の

作にも立たず、動もすれば、己が室に閉籠りて、夜更くるまで寝もやらず、日頃は絶えて用なき机に向ひ、一穗の燈掲げて、怪しげなる薄色の折紙延べ擲げ、命毛の細々と認むる小筆の運び絶間なく、巻いてはかへす思案の胸に、果は太息と共に封じ納むる文の数々、燈の光に宛名を見れば薄紫の色に哀を籠めて、何時の間に習ひけむ貫之流の流れ文字に横笛さま。

世に艶かしき又てふものを初めて我思ふ人に送りし時は心のみる頼みに安からぬ日を覺來なくも暮せしが、簾に觸るゝ夕風のそよとの頼だになし。前もなき只の一度に人の誡のいかで知らるべきと、更に心を籠めて寄す言の葉も亦仇し矢の返す響も無し。心せはしき三度五度答なきほど迷は愈々深み、氣は愈々狂ひ、十度、二十度、哀れ六尺の丈夫が二つなき魂をこめし千束なす文は、底なき谷に投げたらむ隙の如く、只の一度の返り言もなく、天の戸渡る梶の葉に思ふこと書く頃も過ぎ、何時しか秋風の哀を送る夕まぐれ、露を命の蟲の音の葉末にすだく聲悲し。

第六

思へば我しらで戀路の闇に迷ひし瀧口こそ哀

なれ。鳥羽野の煙絶ゆる時なく、佐し野の露
置くにひまなきまゝならぬ世の習はしに濡るゝ
我とは思はねども、相見ての利那に百年の契
をこむる頼もしき例なきにもあらぬ世の中に、
いかなれば我のみは、天の羽衣撫で盡すらむほ
ど永き悲みに、只一時の望だに得協はざる、
思へば無情の横笛や、過ぎにし春のこのかた、
書き連ねたる百千の文に、今は我には言残せる
誠も無し、良し有ればとて此上短き言の葉に、
胸にさへ餘る長き思を寄せむ術やある、情な
の横笛や、よしや送りし文は拙くとも、變らぬ
赤心は此の春秋の永きにも知れ、一夜の松風
に夢さめて、思寂しき衾の中に、我ありし事、
薄が末の露程も思ひ出さむには、など一言の哀
を返さぬ事やあるべき。思へば心な横笛
や。

然ほさりながら他し人の心、我誠もて規る
べきに非ず、路傍の柳は折る人の心に任せ、
野路の花は摘む主常ならず、數多き女房曹司
の中に、いはば萍の浮世の風に任する一女子
の身、今日は何れの汀に止まりて明日は何處の
岸に吹かれやせむ。千束なす我女は讀みも了ら
で捨てやられ、さそふ秋風に桐一葉の哀を残
さざらむも知れず。況してやあでやかなる彼が

顔は、浮きたる色を變づる世の中にそも幾そ
の人を憫しけむ。かの竹にすらかの老女を捉へ
て色清けなる人の、姉ましや、早や彼が名を尋
ねしとさへ言へば、思を寄するもの我のみにて
は無かりけり。よしや他にはあらぬ赤心を寄す
るとも、風や何處と聞き流さむ。浮きたる都の
麗女に二つなき心盡しのかずは我身なが
ら恥しや、ア、心なき人に心して我のみ迷ひ
し思さよ。

待てしばし、然るにても立つ波荒き大海の下
にも人知らぬ眞珠の光あり、外には見えぬ木影
にも情の露の宿する例、まゝならぬ世の習は
しは、善きにつけ、惡しきにつけ、人毎に他に
は測られぬ憂はあるものぞかし。あはれ後とも
言はず今日の今、我が此思を其儘にいづれいか
なる由ありて、我思ふ人の悲み居らざる事を諒
か知るや。想へば那の氣高き藤たけたる横笛
を萍の浮きたる麗女とは僻める我心の誤な
らむも知れず。さなり、我心の誤ならむも知
れず。鳴く蟬よりも鳴かぬ螢の身を焦すもある
に、聲なき哀の深さに較ぶれば、仇浪立てる此
胸の淺瀬は物の數ならず。そもや心なき草も春
に遇へば笑ひ、情なき蟲も秋に感ずれば泣く。
血にこそ染まね、千束なす紅葉重の燃ゆる計り

の我思に、薄雲の隙だに得透さぬ人の心の有耶
無耶は、誰か測り誰か知る。然なり、情なしと
見、心なしと思ひしは僻める我身の誤なりけ
り、然るにても――

瀧口が胸は麻の如く亂れ、とつおいつ、或は
恨み或は疑ひ、或は惑ひ或は慰め、去りて
は來り往きては還る念々不斷の妄想、流は千々
に異れども、落行く末はいづれ同じ戀慕の淵。
迷の霧翳日に見えねば、勇士の刃も切らむに術
なく、あはれや、鬼も挫がむず六波羅一の剛の
者、何時の間にか戀の奴となりすましぬ。

一夜時頼 更開けて尙眠りもせず、意中の幻影
を追ひながら爲す事も無く茫然として机に憑り
居しが、越し方 行末の事、端なく胸に浮び、
今の我身の有様に引き比べて思はず深々と太息
つきしが、何思ひけむ、一聲高く胸を叩いて躍
り上り「嗚呼過てりく」。

第七

歌物語に何の癡言と聞き流せし、無てふ處に
さては吾れ疾より魅せられしかと、初めて悟り
し今の利那に瀧口が心は如何なりしぞ。「嗚呼
過てり」とは何より先に口を銜いて言えず出で
し意料無限の一語、襟元に雪水を浴びし如く、

六尺の總身ぶるゝと震ひ上りて、胸轟き息せはしく、「む」とばかりに暫時は空を睨んで無言の體。やがて眼を閉ぢてつくゝ過越し方を想ひ返せば、哀にもつらかりし思の數々、さながら世を隔てたらむ如く、今更明し暮せし朝夕の如何にしてと驚かれぬる計り。夢かと思へば、現世身の陽炎の影とも消えやらず、現かと思へば夢よりも尙淡き昨春秋の經過例へば永の病に本性を失ひし人のややく我に還りしが如く瀧口は只恍惚として呆るゝ計りなり。

一嗚呼過てり、弓矢の家に生れし身の、天晴功名手柄して、勇士の譽を後世に残すこそ此世に於ける本懐なれ。何事ぞ、眞の武士の脛頭に上するも思はしき一女子の色に迷うて、可惜月日を夢現の境に過ぎむとは。あはれ南無八幡大菩薩も照覽あれ、瀧口時頼が武士の魂の曇なき證據、眞此の通りと、床なる一刀スラリと抜きて青燈の光に差し付くれば、欄たたる氷の刃に水も滴らむず無反の切先 鐙を銜んで紫雲の如く立上る 燒刃の色目も覺むる計り。打見やりて時頼を爾と打笑み、二振三振、不圖平身に映る我顔見れば、こはいかに、肉落ち色蒼白く、ありし昔に似もつかぬ悲慘の容貌。

打駭きて、ためつ、すがめつ、見れば見るほど變り果てし面影は我ならで外になし。扱も癢れたるかな、愧しや、我を知れる人は斯る容を何とか見けむ——そも斯くまで骨身をいためし夢と思へば、深きは我ながら程知らず、是も誰が爲、思へば無情の人心かな。

碎けよと握り詰めたる柄も氣も、何時しか緩みて、臥藪の太眉閃々と動きて、覺えず「あ」と太息つけば、霞む刃に心も曇り、映るは我面ならで、烟の如き横笛が舞姿。是はとばかり眼を閉ぢ、氣を取直し、鐙音高く刃を鞘に納むれば、跡には燈の影ほの暗く、障子に映る影さびし。

嗚呼々々六尺の體に人並の膽は有りながら、さりとは膽甲斐なき我身かな。影も形もなき妄念に悩まされて、しらで過ぎし日はまだしもなれ、迷の夢の醒め果てし今はの際に、めゝしき未練は、あはれ武士ぞと言ひ得べきか。輕しと啣ちし三尺二寸、雙腕かけて盤みしはそも何の爲の極意なりしぞ。祖先の苦勞を忘れて風流三昧に現を抜かす當世武士を尻目にかけし、半歳前の我は今何處にあるぞ。武者と人の笑ふを心に誇りし齋藤時頼に、あはれ今無念の涙は一滴も残らずや。そもや瀧口が此身は空蟬の

もぬけの殻にて、腐れし迄も昔の膽の一片も残らぬか。

世に畏るべき敵に遇はざりし瀧口も、戀てふ魔神には引く弓も無きに呆れはてぬ。無念と思へば心愈々亂れ、心愈々亂るゝに隨れて、亂脈打てる胸の中に迷の雲は愈々擴がり、果は狂氣の如くいらちて、時ならぬ鳴絃の響、劍撃の聲に胸中の渾池を清さむと務むれども、心致にあらざれば見れども見えず聞けども聞えず、命の蔭に踴躍る一念の無は、玉の緒ならで斷たむ術もなし。

誠や、戀に迷へる者は猶底なき泥中に陥れるが如し。一寸上に浮ばむとするは一寸下に沈むなり、一尺岸に上らむとするは、一尺底に下るなり、所詮自ら掘れる墳墓に埋るゝ運命は、悶え苦みて些の益もなし。されば悟れるとは己れが迷を知ることにて、そを脱せるの謂にはあらず。

哀れ、戀の雫を流も残さず飲み干せる瀧口は、只坐して致命の時を待つの外なからむ。

第八

消えわびむ露の命を何にかけてや繋ぐらむと思ひきや、四五日經て瀧口が顔に憂の色漸く

去りて、今までの如く物につけ事に觸れ、思ひ煩ふ様も見えず、胸の嵐はしらねども、表面は櫛の櫛のさらとも喚きず、何者か失意の戀にかへて其心を慰むるものあればならむ。

一日瀧口は父なる左衛門に向ひ、「父上に事改めて御願ひ致し度き一義あり」。左衛門何事ぞ」と問へば、「斯る事、我口より申すは如何なものなれども、二十を越えてはや三歳にもなりたれば、家に酒席の妻なくては萬に事缺けて、快からず、幸ひ時頼見定め置きし女子有れば、父上より改めて婚禮を御取計らひ下されたく、願ひと言ふは此事に候」。人傳に名を聞いてさへ愧らふべき初妻が事、顔赤らめもせず、落付き拂ひし語の言ひ様、仔細ありげなり。左衛門笑ひながら、「これは異な願を聞くものかな、昨かれ早かれ、いづれ持たねばならぬ妻なれば、相應はしき縁もあらばと老父も疾くより心懸け居りしぞ。シテ其方が見定め置きし女子とは、何れの御内か、但しは御一門にてもあるや、どうぢや」。「小子が申せし女子は、然る門地ある者ならず」。「然らばいかなる身分の者ぞ、衛府附の侍にてもあるか」。「否、さるものには候はず、御所の曹司に横笛と申すもの、聞けば御室わたりの郷家の娘なりとの事」。

瀧口が顔は少しく青ざめて、思ひ定めし眼の色徒ならず。父は暫し語なく俯ける我子の顔を凝視め居しが、「時頼、そは正氣の言葉か」。「小子が一生の願、神以て許ならず」。左衛門は兩手を膝に置直して聲勵まし、「やよ時頼、言ふまでもなき事なれど、婚姻は一生の大事と言ふこと、其方知らぬ事はあるまじ。世にも人にも知られたる然るべき人の娘を嫁子にもなし、其方が出世をも心安うせむと、口頃より心を用ゆる父を其方何と見つるぞ。よしなき者に心を懸けて家の譽をも顧みぬほど無分別の其方にてはなかりしに、扱は嫌てより人の噂に違はず、横笛とやらの色に迷ひしよな。一否、小子こと色に迷はず香にも酔はず、神以て戀でもなく浮氣でもなし、只少しく心に誓ひし仔細の候へば」。

左衛門は少しく色を起し、「默れ時頼、父の耳目を欺かむ其語、先頃其方が儕輩の足助二郎殿、年若きにも似ず、其方が横笛に想を懸け居ること後の爲ならずと懇に潛に我に告げ呉れしが、其方に限りて浮きたる事のあるべきと思はれねば心も措かで過ぎ來りしが、思へば父が此眼目の過なりし。神以て戀にあらずとは、何處まで此父を袖になさむずる心ぞ。不埒

者め、話にも聞きつらむ、祖先兵衛直頼殿餘五將軍に仕へて拔群の譽を顯せしこのかた、弓矢の前には後れを取らぬ齋藤の血統に、女色に魂を奪はれし未練者は其方が初ぞ。それにて武門の恥と心付かぬか、弓矢の手に面目なしとは思はずか。同じくば名ある武士の末にてもあらばいざしらず素性もなき土民郷家の娘に、茂頼斯くて在らむ内は、齋藤の門をくぐらせむ事思ひも寄らず」。

老の徹短慮に息巻荒く罵れば、時頼は默然として只差俯けるのみ。やゝありて左衛門は少しく面を和けて、「いかに時頼、人若き毎に皆過はあるものぞ、萌出づる時の美はしさに、霜枯の衰は見えねども、何れか秋に遭はで果つべき、花の盛は僅に三日にして跡の青葉は何れも色同じ、あでやかなる女子の色も十年はよも續かぬものぞ、老いての後に願れば色めづる若き時の心の我ながら解らぬほど癡けたるものなるぞ。過は改むるに憚る勿れとは古哲の金言、父が言葉胸に落ちたるか、横笛が事思ひ切りたるか。時頼、返事のなきは不承知か」。

今まで眼を閉ちて默然たりし瀧口は、やうやく首を擡げて父が顔を見上げしが、兩眼は潤ひて無限の情を湛へ、満面に顯せる悲哀の裡

に搖かぬ決心を示し、徐に兩手をつきて、「一々道理ある御仰、横笛が事、只今限り刀にかけと思ひ切つて候、其代に左頼が父の願、御聞届下さるべきや」。左衛門は然もありなむと打點頭き、「それでこそ茂頼が伴、早速の分別、父も安堵したるぞ、此上に願とは何事ぞ。一今日より永のおん暇を給はりたし。言終るや、堰止めかねし溜涙はらりと流しぬ。

第九

天にも地にも意外の一言に、左衛門呆れて口も開かず、只其子の顔色打掃れば、瀧口は徐に涙を拂ひ、一思の外なる御驚に定めて浮の空とも思されむが、此願こそは時頼が此座の出来心には露候はず、斯る曉にはと豫てより思決めし事に候。事の仔細を申さば只御心に違ふのみなるべけれども、申さざれば猶以て亂心の沙汰とも思召されむ。申すも思はゆげなる横笛が事、まこと言ひ交せし事だに無けれども、我のみの哀は中々に深き程こそ知れね、つれなき人の心に猶更狂ふ心の駒を繋ぐむ手綱もなく、此春秋は我身ながら苦かりし。神かけて戀に非ず、迷に非ずと我は思へども、人にては浮氣とや見えもしけむ。唯劍に切らむ影もな

く、弓も射らむ的もなき心の敵に向つて、そも幾その苦戦をなせしやは、父上、此顔容のやつれたるにて御推量下されたし。時頼が六尺の體によくも擔ひしと自らすら駭く計りなる積りくし夢事の數、我ならで外に知る人もなく、只戀の奴よ、心弱き者よと、世上の人に歌はれむ残念さ、誰に向つて推量あれとも言はむ人なきこそ、かへすくも口惜しけれ。此儘の身にてはこの顔下げて武士よと人に呼ばるべき、腐れし心を抱きて、外見ばかりの伊達に指さむこと、兩刀の曇なき手前に心がめて我から忍びず。只此上は横笛に表向き婚姻を申入るゝ外なし、されどつれなき人心、今更驚かむ様もなく、日や素性賤しき女子なれば、物堅き父上の御容なきこと元より覺悟候ひしが、只最後の思出にお耳を汚したる迄なりき。所詮天魔に魅入れし我身の定業と思へば、心を煩はすもの更に無し。今は小子が胸には横笛がつれなき心も残らず、月日と共に積りし哀も宿さず、人の恨も我悲も洗ひし如く痕なけれども、残るは只此世の無常にして頼み少きこと、秋風の身にしみんと感じて有漏の身の換へ難き恨、今更骨身に徹へ候。惟れば誰が保ちけむ東父西母が命、誰が嘗めたりし不老不

死の藥、電光の裏に假の生を寄せて、妄念の間に露の命を苦む、愚なりし我身なりけり。横笛が事御容なきこそ小子に取りては此上もなき善智識、今日を限り世を厭ひて誠の道に入り、華染の衣に一生を送りたき小子が決心。二十餘年の御恩の程は申すも愚なれども、何れ近れ得ぬ因果の道と御諦ありて、永遠の御暇を給はらむこと、時頼が今生の願に候。胸一杯の悲に語さへ震へ、語り了ると其儘、齒根喰ひ絞りて、詰と耐ふる斷腸の思、勇士の愁嘆流石にめしからず。過ぎ越せし六十餘年の春秋、武門の外を人の住むべき世とも思はず、涙は無念の時出づるものぞと思ひし左衛門が耳に、哀れに傳しき瀧口が達懷の、何として解かるべき。歌詠む人の方便とのみ思ひ居し戀に惱みしと言ふさへあるに、木の端とのみ嘲りし世捨人が現在我子の願ならむとは、左衛門如何でか驚かざるを得べき。夢かとばかり一度は呆れ、一度は怒り、老の兩眼に溢るゝ計りの涙を潑べ、「やよ倅、今言ひしは儘に齋藤時頼が眞の言葉か、幼少より筋骨人に勝れて逞しく、膽力さへ半りたる其方、行末の出世の程も頼母しく、我白髮首の生甲斐あらむ口をば、指折りながら待侘び居たるには

引換へて、今と言ふ今老の眼に思ひも寄らぬ恥辱を見るものかな。奇怪と言はむ、不思議と言はむ。悲深き小松殿が左衛門は善き子を持たれし、と我を見給ふ度毎のお言葉は常々人に語りし我れ、今更乞食坊主の倅を持つて、いづこに人に合する二つの顔ありと思つてか。やよ、時頼、ヨック聞け、他は言はず、先祖代々よりの齊藤一家が被りし平家の御恩はそも幾何なりと思へるぞ。殊に弱年の其方を那程に目をかけ給ふ小松殿の御恩に對しても、よし如何に堪へ難き理由あればとて、斯る法外の事言はれ得る義理か。弓矢の上にくそ武士の誓はあれ、兩刀捨て、世を捨て、悟り顔なる倅を左衛門は持たざるぞ。上氣の沙汰ならば容赦もせむ、性根を据ゑて、不所存のほど過つたと言はぬかッ。

第十

兩の拳を握つて、怒の眼は鋭けれど恩愛の涙は忍ばれず、雙頬傳つてはふり落つるを拭ひもやらず、一息つよく、「どうぞや、時頼、返答せぬかッ」。

深く思ひ決めし満口が一念は石にあらねば轉ばすべくも非ざれども、忠と孝との二道に、恩

義をからみし父の言葉に、思ひ設けし事ながら、今更に腸も千切るゝばかり、聲も涙に曇りて、見上ぐる父の顔も定かならず、「仰せらるゝ事、時頼いかで、理と承はらざるべき。小松殿の御事は云ふも更なり、年寄り給ひたる父上に、斯る嘆を見せ參らする小子が胸の苦しきは、喲ふるに物も無けれども、所詮吾世と觀じては、一切の事に離れし我心、今は返さむ術もなし、忠孝の道、君父の恩、時頼何として疎かに存じ候べき。然りながら一度人身を失へば、御切還らずとかや、世を換へ生を移しても生死妄念を離れざる身を思へば、悟の日の晩かりしに心念がれて、世は是迄とこそ思はれ候へ。只是れまで思ひ決めしまで重ねし幾重の思案をば、御知りなき父上には、定めて若氣の知慮とも、當座の上氣とも聞かれつらむこそ口惜しけれ、言はゞ一生の浮沈に臨る大事、時頼不肖ながらいかでか等閑に思ひ候べき。證ずるに自他の悲を此胸一つに收め置きて、亡からむ後の世まで知る人もなき身の果敢なき、今更是非もなし。父上、願ふは此世の縁を限り、時頼が身は二十三年の秋を一期に病の爲に敢なくなりしとも御諦め下されかし。不孝の悲は胸一つには堪へざれども、御陀申さむに辭もな

し、只々御救を乞ふ計りに候へ。渡ぐ涙に哀を籠めても、飽くまで世を背に見たる我子の決心、左衛門今は夢とも上氣とも思はれず、愛しと思ふほど彌増す憎さ。悲恩愛に燃ゆる怒の始に、面朱を渡けるが如く、張り裂く計りの胸の思に言葉さへ絶えく、
「イ言はして置けば父をさし置きて我面白の勝手の理窟、左衛門聞く耳持たぬぞ。無常因果と、世にも癒けたるを食坊主のえせ假聲、武士がどの口もて言ひ得る語ぞ。弓矢とる身に何の無常、何の因果。——時頼、善く聞けよ、吾類の狗さへ、一日の飼養に三年の恩を知ると云ふに非ずや。匍へば立て、立てば歩めと、我年の積るを思はで、育て上げし二十三年の親の辛苦、さては重代相忌の主君にも見換へむもの、世に有りと思ふ其方は、犬にも劣りしとは知らざるか。不忠とも、不孝とも、亂心とも、狂氣とも、言はむ様なき不所存者、左衛門が眼には、我子の容に化けし惡魔とより外は見えざるぞ、それにても見事其處に居直りて、齊藤左衛門茂頼が一子ぞと言ひ得るか、ならば御先祖の御名、立派に申して見よ。其方より眼を、延もなし、人の數にも入らぬ木の端は、勿論親でもなく、子でもなし。其一念の直らぬ間は、時頼、シ、七